

フィールドワークによる健康学習の実践とその意義

—保健授業に関する実践的指導力育成の視点から—

田 中 誠 二

1. はじめに

「私たちの健康はいかにつくり、守られてきた（いる）のか」——筆者は、本学教育学部で保健体育やスポーツ科学を専攻する学生とともにこうした問題を考えている。健康について考えるとき、多くの学生は肉体的あるいは精神的側面から「個人の“内側”の問題」として捉える傾向がある。そのため、すぐさま「栄養、運動、休養」という個人的な生活行動の話へと接続し、それをいかに見直し改善していくかという議論になる。もちろん「調和のとれた食事」、「適切な運動」、「十分な休養・睡眠」のいわゆる“健康3原則”が重要であることは疑いの余地のない事実である。しかし一方では、私（たち）の健康がもう少し大きな枠組みのなかでつくり、守られているということもまた確かである。

例えば、中学校の保健授業で取り扱われる「健康と環境」は、まさに、個人と個人を取り巻く環境との関わりにおいて健康を理解することが課題となる。新潟水俣病は、工場排水による環境汚染（メチル水銀化合物汚染）が原因となり深刻な身体被害を引き起こした。このことを学ぶのはもちろんだが、阿賀野川流域で暮らす人びとの漁撈を中心とした生業や食生活・食文化との関係性にまで視野を広げて捉えなければ、実感として「環境の保全に十分配慮し、環境を汚染しないように衛生的に処理する」¹⁾（中学校学習指導要領）ことの重要性を理解することにつながらない。とくに保健体育の教員を目指す学生には、健康の知識を社会問題のなかに位置づけて考えたり、あるいは社会の側から個人の健康問題を眺め改善策を多面的に検討したりできるような、広い視野で健康を捉える力量が必要となる。

このように、健康を「個人に閉じた問題（＝個人

の“内側”の問題）」として限定的に考えるのではなく、個人と社会との「接点」あるいはその「関係性」において幅広に捉える視角の必要性を念頭に置きながら、筆者は「フィールドワーク」を通じて人びとの健康の諸問題にアプローチする方法を学生とともに模索してきた。

本稿では、学部3年生がフィールドワークを通じて、人びとの健康実践を観察したグループ研究の取り組みを報告する。本学教育学部にて保健体育あるいは健康スポーツ科学を専攻する学生は、学部3年次に主に研究の方法論を学ぶ授業（研究演習／通年）を受講する。この演習はオムニバス形式で展開され、保健体育・スポーツ科学講座の教員がそれぞれの専門分野から研究方法（実験や測定、質問紙調査、文献調査、統計手法など）を解説する。受講生は4年次に予定される卒業研究を視野に入れながら研究の手順を具体的に学び、第2学期（第3ターム・第4ターム）の後半には一年間の総まとめとして少人数に分かれたグループ研究を行うこととしている。ここで取り上げる過去2か年分の報告は、筆者が担当するゼミにおいて取り組まれた研究実践を要約したものである。年度によって若干の変動はあるもののゼミ学生のうち約7～8割は教員免許の取得を希望しており、その多くが3年次の教育実習において保健の授業づくりを経験する。この経験が研究の計画・実施の各段階に大きく影響しており、とくにここ数年は「健康」に関わる諸問題を中心としながら「学校」や「教育」、「子ども」をキーワードに研究テーマが設定されることが多い。本稿の執筆にあたっては、彼らの調査記録やプレゼン資料、筆者が記録したメモなどを材料に内容を振り返りながら、研究によって得られた結果よりもむしろグループでのディスカッションや調査研究のプロセスに重点を置いて記述することとした。

2. 教員養成段階における「アクティブ・ラーニング」の意義

本論に入る前に、現行の学習指導要領における保健分野の記述内容を確認しておきたい。中学校の保健体育〔保健分野〕は、「個人生活における健康・安全に関する理解を通して、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善していく資質や能力を育てる」¹⁾ことを目標とする。内容は4つで構成され、(1)心身の機能の発達と心の健康、(2)健康と環境、(3)傷害の防止、(4)健康な生活と疾病の予防について理解を深めることとしている¹⁾。保健の授業を通して、個人生活における健康や安全に関する種々の知識を得ることはもとより、それらが「生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、改善」することへと生かされるような「『生きて働く』学力」²⁾の形成に重点が置かれていることを押さえておく必要がある。

わが国における健康課題の中心は感染症から生活習慣病へと転換した。また、近年は高齢化の進行にともなう寝たきりや認知症の問題、心身ストレスの増大によるうつ病などの精神疾患、性に関する問題や薬物乱用、アレルギー疾患など健康問題は多様化している。児童生徒が学校教育を修了したあとも、日常生活で直面するこうした様ざまな健康問題の背景や原因を自ら主体的に分析し、解決していくことができるような態度や能力を保健の授業で育成したい。そのためには、従来、問題視されているような教科書の読み合わせを中心とする「伝達・知識注入型」の保健授業から、「学んだことが、新たな学習課題を意識させ、さらなる追究へと子どもたちを向かわせていく」ような「触発・追究型」授業へと転換を図っていく必要がある²⁾。中学校学習指導要領の「内容の取扱い」では、「保健分野の指導に際しては、知識を活用する学習活動を取り入れるなどの指導方法の工夫を行うものとする」¹⁾と明記されている。これは、保健の授業づくりにおいて“何を学ぶか(教えるか)”はもとより、“どのように学ぶか(教えるか)”を重視することの必要性を示したものである。事例などを用いたディスカッションやブレインストーミング、課題学習、コンピュータの活用などがその具体的方法の例として挙げられている(中学校学習指導要領解説 保健体育編)³⁾。

「伝達・知識注入型」授業から「触発・追究型」授業へ。授業者としてこの転換をいかに図っていくか。教員養成段階にある学生がこうした課題を念頭

に置きながら保健の授業づくりを学んでいくことは重要である。そのためには、大学生自らが身のまわりの健康課題を(再)発見し様ざまな方法や材料を用いて主体的に分析・考察を深めること、さらには、他者との対話・議論を通じて問題解決の糸口を探っていくような実践的な学びのプロセスを経験することが不可欠である。また、こうした学びは、冒頭で取り上げた、健康を「個人に閉じた問題」として限定的に捉えがちな学生の健康観(考え方)を揺さぶることになる。本稿は、フィールドワークを通じた大学生の健康学習を「アクティブ・ラーニング」の一つの事例として捉え、その意義を検討する。

なお、はじめに紹介するグループ活動(「学校給食と牛乳」に関する調査研究)は、フィールドワークの企画・実施を念頭に着手したもののだが、後述のように、対象となる新潟県三条市は、当時「学校給食における『牛乳』の是非」を巡って議論の真っ只中にあり、また、その結論が出される時期が調査時から半年以上先に予定されていたことから、最終的には現地調査を見送ることとした。したがって、このグループ活動は厳密には「フィールドワーク」とは言えないが、現地に出る前段階の取り組みとして、とくにディスカッションを重点的に繰り返し行い、試行錯誤するなかで「深い学び」を得た実践として紹介する価値があると思われる。本稿では、フィールドワークの準備段階にある活動として位置づけ、積極的に取り上げてみたい。

3. 学校給食に「牛乳」は必要?: 三条市の議論を題材に(H26年度)

2014(平26)年12月、新潟県三条市が学校給食に関する「ある試み」をスタートさせた。それは、学校給食につきものである牛乳を試験的に(4か月間)停止するというものである。このニュースは県内だけでなく全国で取り上げられ大きな議論を生んだ。「なぜここまで大きな話題になるのか」、「たしかに私たちが食べてきた学校給食には必ず牛乳が添えられていたけど、よく考えてみると不思議だよね」——平成26年度のゼミ学生4名は身近にあった「あたりまえ」を疑うところから研究にとりかかった。研究の目的は、わが国における学校給食の変遷をたどり「学校給食と牛乳」の関係を多面的に考察すること、そのうえで、三条市の試行的な牛乳休止の議論について自分たちなりの視点をもつこと、であった。

3-1. 新聞記事における3つの論点：＜ICTを活用した情報の収集・整理＞

まず、彼らが着手したのは「三条市の学校給食における牛乳の試験的休止」に関する議論を、新聞記事を中心に整理することである。新潟大学附属図書館が契約しているオンライン記事データベース「朝日新聞 聞蔵Ⅱ ビジュアル」, 「新潟日報データベース」の利用を中心に、関係する新聞記事を収集・整理した。集められた記事を共有し精読するなかで、そこに記された内容を大きく3つに分類することができた。まず1つ目は、「ごはんと牛乳は合わない」という、とくに保護者を中心に相次いだとされる意見についての記述である。三条市では2008（平20）年度から「完全米飯給食」に取り組んでおり、パンや麺類を主食とすることをやめ米飯のみに切り替えている。「ごはんと牛乳」の組み合わせに対する違和感がこうした流れのなかで生じてきていること、また牛乳休止をめぐる論議の中心の問いとなっていることを確認した。また、同時期に取り上げられたテレビ番組の県内ニュースにおいても、この「ごはんと牛乳」の相性の問題が盛んに報道され、実際に三条市内の小学生に「牛乳とごはんは合いますか？」と尋ねるインタビューの様子が繰り返し映し出された。一方、「和食に牛乳が合うかは好みの問題」という主張も複数の新聞記事から読み取ることができた。2つ目は、「学校給食における栄養バランス」についての記述である。三条市は、「牛乳に含まれていた分のたんぱく質やカルシウムは、魚や肉など主菜を大きくしたり、小魚の手作りふりかけを増量、ヨーグルトを週1～2回出して補う」（朝日新聞、2014年10月30日朝刊）こととした。また、牛乳の有無による給食の残量（食べ残し）を調査し、その結果を、翌年2015（平27）年10月以降の最終的な方針決定（学校給食に牛乳を出すか、出さないか）における検討材料とすることが多くの記事で記された。最後の3つ目は、「消費増税による給食費の値上げ」を記した記事である。収集された記事の全体からすると、それほど多く取り扱われた内容ではなかったが、同年春の消費増税が三条市の牛乳休止の議論に拍車をかけていることを知り、学生たちは「事はそれほど単純でない」ことを実感した。

3-2. 学校給食になぜ「牛乳」はつきものか：わが国の学校給食の歴史の変遷から

新聞記事の収集・整理作業を経て、三条市の牛乳休止の議論の全体像が把握されたが、「そもそも、

学校給食になぜ『牛乳』なのか？」という問題は明らかでない。そこで、次の課題はわが国における学校給食の歴史を整理するなかで、とくに「牛乳」がどのように位置付いてきたのかを検討することであった。学校給食は、第二次世界大戦直後の食糧難の時期に、アメリカ産輸入小麦と脱脂粉乳の援助によって開始され、日本全国に普及した（ちなみに、わが国の学校給食の始まりは1889（明22）年、山形県鶴岡町（現鶴岡市）の私立忠愛小学校、「欠食児童」対策として実施された）⁴⁾。子どもたちの栄養状態の改善が喫緊の課題であった当時の日本は、アメリカによる食糧援助によって学校給食を開始し、学童の体位は著しく向上した⁵⁾⁶⁾。学校給食のはじまりが「パンとミルク」であったことを知った学生たちは、三条市の学校給食における牛乳休止の議論が、実は、歴史的にみて非常に奥の深い問題であること、牛乳の提供を取り止めることは学校給食に新たな歴史を刻む大きな決断となることに気づいた。（また、学校給食がアメリカの食糧援助によって実現し栄養改善に重要な役割を果たしたことが強調される一方で、この食糧援助がアメリカの小麦輸出戦略や余剰農作物処理に基づく政策であったとする主張も存在し⁷⁾⁸⁾、私たちの食事に潜む「政治性」を垣間見ることもなった。）その後、脱脂粉乳は「牛乳」にかわり、主食であったパンも1970年代半ばに米飯給食が導入されるようになる。主食やおかずがかわっても牛乳は常に存在してきた。学生は、三条市の議論が学校給食のこれからを考える重要なきっかけを与えたという点で大きな意義があることを、ディスカッションを重ねるなかで確認していった。

3-3. 脱脂粉乳って本当にマズいの？：＜脱脂粉乳を試飲してみる＞

学校給食の歴史を振り返り「学校給食と牛乳の“深い関係”」に気づいた学生たちは、その過程で、学校給食の開始時から遅いところでは1970年代前半まで提供されていた「脱脂粉乳」について着目した。脱脂粉乳とは「牛乳から脂肪分を除去した脱脂乳から水分を取り除いて粉末状にしたもの」⁹⁾で、これを平釜でお湯に溶いて子どもたちに与えられた。脱脂粉乳ミルクの味は子どもたちに評判が悪く、ゼミ学生のなかには当時の給食を知る祖父母から「脱脂粉乳の不味さ」を聞かされた経験をもつ者もいた。そこで、実際にスーパーで販売されている脱脂粉乳（スキムミルク）を購入し、お湯で溶いて



写真1 脱脂粉乳の試飲

試飲し、自分の舌で味を確かめてみることにした(写真1)。

当時、アメリカから援助された脱脂粉乳はバターを作った残りの廃棄物であり、アメリカでは家畜用のエサとされていたものであった¹⁰⁾。現在市販されているスキムミルクは品質、風味ともに向上しており、「思ったほどマズいものではないけど、でもあまり美味しいものでもないね」というのが彼らの感想であった。

3-4. 牛乳休止の議論における「子どもたち」の不在：「生きた教材」をめぐるディスカッション

第二次世界大戦後に日本全国へ普及した学校給食は、いまや祖父母・親・子どもの三代が体験している家族も少なくない。それぞれが、それぞれに学校給食の経験を持ち、思い出として振り返ることができる。であるからこそ、三条市における牛乳休止の試行は現在学校に関わりのある人びとだけでなく、「学校給食の卒業生」である私たちの多くを巻き込んだ議論へと発展した。研究にとりかかった当初のディスカッションでは、学生は自らの給食の経験のみを頼りに「私は牛乳瓶一本を飲み干すのに苦労した、嫌いだった」とか「牛乳は苦手だったからいつも最後に残った」とか「俺は牛乳が好きだった」という具合で、極めて表層的な話し合いに終始していた。それぞれが問題を客観的に捉えようとする意識が弱く、テレビニュースのインタビューでマイクを向けられた児童生徒と同じように、個人的な「好き・嫌い」の問題から距離を取って意見を述べることが難しい状況にあった。しかし、新聞記事の抜き取りや種々の文献資料の検討を進め、そこでの情報や互いの感想を共有する作業を繰り返すうちに、「家庭で牛乳を飲む習慣のない子どもにとっては給食から牛乳が無くなることの意味は大きいね」とか



写真2 文献資料の検討とディスカッション

「牛乳を取り止めた分の栄養素を、小魚のふりかけなどで補う工夫はわかるけど、とくに夏場は『水分の補給』としての意味が大きいよね」というように、あらゆる面から議論を深めていこうとする姿勢が見られるようになった(写真2)。

学校給食に関する文献を読み合わせていたときのこと、学生の一人が「生きた教材」という言葉に着目した。この言葉は1980年代から学校給食に関わる市民運動などで使われていたもので、「食育推進基本計画」(第一次計画、2006年3月)¹¹⁾のなかでこの言葉が登場してから活発に使用されるようになったという⁴⁾。以下に、この言葉が使用された2箇所を引用する(下線は筆者による)。

「学校給食に『顔が見える、話ができる』生産者等の地場産物を使用し、食に関する指導の『生きた教材』として活用することは、子どもが食材を通じて地域の自然や文化、産業等に関する理解を深めるとともに、それらの生産等に携わる者の努力や食への感謝の念を育む上で重要であるほか、地産地消を推進する上でも有効な手段である。」(P12)

「子どもの望ましい食習慣の形成や食に関する理解の促進のため、学校給食の一層の普及や献立内容の充実を促進するとともに、各教科等においても学校給食が『生きた教材』としてさらに活用されるよう取り組むほか、栄養教諭を中心として、食物アレルギー等への対応を推進する。」(P18)

三条市の学校給食における牛乳休止の議論は、多くのメディアに取り上げられ全国的にも注目を浴びた。学校給食そのものを見つめ直す1つのきっかけとなったことは間違いないだろう。しかし、「食育」

の視点からこの問題を考えようとするとき、学生それぞれの間にはどうもすっきりとしない感覚が残っていた。ディスカッションが停滞してしばらくたったとき、先ほどの学生が「給食における牛乳をどうするか、という話し合いに『児童生徒の存在がない』ように思うんだけど、どう思う？」という趣旨の発言をしたのである。「子どもたちが地域の自然や文化、産業等に関する理解を深める」¹¹⁾ ための「生きた教材」として、この牛乳休止をめぐる議論そのものをもっと活用できたのではないだろうか。子どもたちが献立の1つである牛乳を学びの「入り口」として、牛乳の栄養素を調べて食と健康の関係について理解を深めたり、学外に出て酪農家の仕事を調べるなかで食と地域産業の関わりを考えたり、あるいは、一日3回の食事を家族とともに見直す機会ともなり得たかもしれない。ディスカッションは、学校給食における牛乳休止の議論を題材としながら、最終的には、「健康を学ぶプロセスに子どもたちをいかに引き寄せていくか」という新たな問題へとたどり着いたところで一区切りとした。

このグループ研究は、三条市における議論が「現在進行形」で進められていた時期に行われたこともあり、実際に三条市を訪問しての関係者への聞き取り調査は見送ることにしたが、ここでの検討作業を足掛かりとしてメンバーの一人が卒業研究へと発展させ、複数の関係者への聞き取りを中心に学校給食の教育的役割について論じた(松田和樹「学校給食の教育的役割に関する考察～「生きた教材」への提案～」平成27年度卒業論文)。

(※付記) 三条市では牛乳休止の試行期間を経て検討を進め、2015(平27)年9月から市内小中学校の給食から牛乳を外し、新たに給食時間外に牛乳を飲む「ドリンクタイム」を設けることとなった。学校給食と牛乳飲用の「分離」についても賛否両論あることが報じられている(新潟日報, 2017年3月7日)。

4. 学校トイレの問題: 「あなたは和式トイレで用を足せますか?」(H27年度)

平成27年度のゼミ学生5名が研究テーマに取り上げたのは「子どもとトイレ」の関係である。朝日新聞の記事によれば、自宅や商業施設のトイレの多くが洋式化されているのに対し、小学校のトイレはいまだ和式が主流。予算の問題があり改修がなかなか進んでいないのが現状である(2014年12月20日

夕刊)。このような状況のなかで「和式トイレで排便ができない子ども」の存在に目をつけた。「学校でうんちをしたくない」(同記事)という子どもたちが直面している学校トイレの問題とはどのようなものなのか、また、子どもたちの排便に対する抵抗感をなくすための手立てとして「教育」にどのような役割が求められているのか(実際にどのような「トイレ教育」がなされているのか)、多面的に検討することを課題とした。

4-1. 新聞記事やインターネット検索による情報の収集・整理

まずは「学校のトイレ」に関する諸問題の情報収集・整理を行い、何が問題となっているのか、子どもたちはなぜ学校のトイレで排便を我慢するのか、といった内容を中心に全体像の把握に努めた。新聞記事の検索は(平成26年度の取り組みと同様に)「朝日新聞 聞蔵II ビジュアル」, 「新潟日報データベース」を使用し, 「和式トイレ」, 「小学校トイレ問題」などの検索ワードを入力して関係する記事を収集・整理した。得られた種々の情報を共有し記述内容を検討していくと、学校のトイレをめぐるいくつかの問題が整理された。

まずは、学校トイレの「5K」と呼ばれるマイナスイメージ——「汚い」, 「臭い」, 「暗い」, 「怖い」, 「壊れている」である。児童は学校のトイレに対してこうした負のイメージを抱き、使用を敬遠する傾向がある。また、学校トイレに設置されている大便器の形状(和式か、洋式か)に関する記述は多くの新聞記事の中心テーマとなっていることが確認された。朝日新聞の2012年11月3日朝刊では、「学校の和式便器に悩む子どもたち」との見出しで「便器を巡る、家庭と学校の“ギャップ”」の狭間で悩みを抱える子どもたち取材している。この記事で紹介された調査結果(小林製薬調べ, 2012年6月)では、回答した小学生412人のうち半数近い46%が「小学校でうんちを我慢したことがある」と答え、その理由として「和式が苦手」, 「トイレがくさい」などトイレの環境面や、「恥ずかしい」という周囲の目を気にする回答が目立った。また、自宅に設置されるトイレの98%が洋式である一方、小学校のトイレは「全部和式」, 「ほとんど和式で一部洋式」が全体の6割以上を占めており、小学校入学前に和式トイレで排便を経験する機会が少ないことが、子どもたちに戸惑いを抱かせる大きな要因となっていることを把握した。

そのほかで、グループが注目した問題が「しゃがむ」ことができない、という子どもたちの身体にみられる変調である。いくつかの記事で「和式トイレにうまくしゃがめない」という要因に関する記述があった。高齢者に多い「ロコモティブシンドローム（運動器症候群）」の兆候が子どもたちに広がりつつあるとの指摘もあり（NHKクロズアップ現代、2014年4月23日放送）¹²⁾、トイレ環境の変化への対応とは別に、子どもたちの身体の側にも和式トイレの使用を妨げる要因が存在している可能性がある。これは学生たちにとって驚きであった。

4-2. 絵本にトイレはどのように描かれている?: 新潟市ほんぽーと中央図書館における児童書調査

新聞記事等の調査では、小学校におけるトイレの問題が多く取り上げられ、和式トイレの使用に戸惑う児童や、「5K」と呼ばれるマイナスイメージによってトイレの使用を敬遠する子どもの姿が把握できた。そのうえで、学生たちは「学校」のトイレの問題から少し離れて、小学校入学前の幼児期にトイレの使用に関する教育やしつけがいかに行われているのかを調べてみようということになった。そこで

彼らが注目したのが「絵本」である。読み聞かせなどで幼児が目にする機会の多い「絵本」を対象とし、そのなかで「トイレ」がどのように描かれているか、その内容や表現について考察してみようという大変ユニークなアイデアである。調査は2015年12月20日、児童図書が多く所蔵されている「新潟市ほんぽーと中央図書館」内の「こどもとしょかん」(1階)にて実施された(写真3)。

まず、中央図書館内の「図書(児童)」を対象に“トイレ”、“うんち”、“うんこ”をタイトルに含む児童図書を検索すると、“トイレ”は27件、“うんち”は

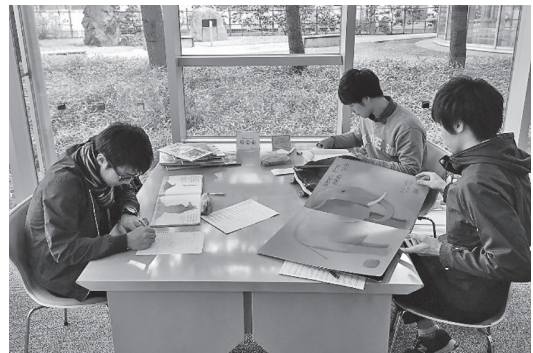


写真3 新潟市ほんぽーと中央図書館における児童書調査

表1 検索ワード「トイレ」でヒットした児童図書(27件)

| | タイトル | 作者など | 発行年 |
|----|----------------------|------------------|------|
| 1 | トイレをつくる未来をつくる | 会田 法行 | 2014 |
| 2 | がっこうのおばけずかん | 斉藤 洋 | 2014 |
| 3 | ぼくのトイレ | 鈴木 のりたけ | 2011 |
| 4 | トイレの神様 | 植村 花菜 | 2010 |
| 5 | トイレでうんち | リスベット・スレーヘルズ | 2008 |
| 6 | 真夜中の学校レストラン | たかい よしかず | 2007 |
| 7 | きれいにふける? トイレレットペーパー | 中須賀 朗 | 2007 |
| 8 | トイレのおかげ | 森枝 雄司 | 2007 |
| 9 | この本、おもしろいよ! | 岩波書店編集部 | 2007 |
| 10 | 紫ババアレストラン | たかい よしかず | 2006 |
| 11 | トイレとつきゅう | 織茂 恭子 | 2006 |
| 12 | おしゃべりさん | さいとう しのぶ | 2005 |
| 13 | へんしんトイレ | あきやま だし | 2005 |
| 14 | 地獄からもどった黒ねこ | 木暮 正夫 | 2003 |
| 15 | プールで死者がよんでいる | 木暮 正夫 | 2002 |
| 16 | トイレにいていいですか | 寺村 輝夫 | 2002 |
| 17 | トイレのなぞ48 | 日本トイレ協会 | 2001 |
| 18 | 七不思議レストラン | たかい よしかず | 2001 |
| 19 | 世界が見えてくる身近なもののはじまり 2 | PHP 研究所 | 2000 |
| 20 | ふしぎなトイレくん | ニコラス・アラン | 1997 |
| 21 | ぼくんちだいまトイレバトル! | 糸川 京子 | 1996 |
| 22 | 放課後のトイレはおばけがいっぱい | 日本民話の会学校の怪談編集委員会 | 1991 |
| 23 | ななえがトイレでないたこと | 一倉 宏 | 1990 |
| 24 | ちょっといれて | さとう わきこ | 1987 |
| 25 | トイレにいていいですか | 寺村 輝夫 | 1981 |
| 26 | ちょっといれて | さとう わきこ | 1979 |
| 27 | トイレとつきゅう | おりも きょうこ | 1978 |

○検索ワード: “トイレ” <※対象資料: 図書(児童)> (調査日 2015年12月20日時点での検索結果)

38件, “うんこ”は17件がヒットした(表1)。中央図書館の蔵書だけでもこれだけの数の「トイレ・うんち本」が存在することに学生たちは驚いた様子だった。その後, 手分けをしてこれらの図書を一冊ずつ手に取り, その内容を①登場人物, ②描かれている大便器の形(洋式か, 和式か), ③その本が伝えようとする内容(メッセージ)という視点から整理・検討する作業に取り掛かった。事前のディスカッションでは, 「絵本にはトイレ(大便器)が多く描かれていて, そこから子どもたちはトイレの使い方を学んでいるのではないか」, 「発行年の古い絵本には『和式トイレ』が多く描かれ, 新しくなるにつれて『洋式トイレ』を描く絵本が増えていくのではないか」という仮説を立てた。とくに後者は, これまで進めてきた新聞記事等の検討により明らかになった, 家庭における洋式トイレ普及の経年的な進行という現状を踏まえての予想である。日本衛生設備機器工業会による調べでは, 「1970年には和式便器の出荷が約7割と洋式を圧倒していたが, 80年に逆転, 06年には97対3とほとんどが洋式となった。」(朝日新聞, 2009年3月19日夕刊)。こうした現状を後追いするように絵本のなかでも「トイレの洋式化」が進んでいるのではないかと, 学生たちは考えたのである。しかしながら, 調査後の話し合いでは, 「便器の描写そのものが少ない」, 「(便器の描写よりも)うんちのキャラクターや動物のうんちの写真, イラストなどが多く描かれている」という意見が共通して出された。また, トイレの使い方というよりも「うんちをすることは恥ずかしくない」, 「トイレって怖いところじゃないんだよ」, 「うんちを我慢することはいけないことだよ」という, 子どもたちのトイレに対する抵抗感を和らげるようなメッセージが多いとの意見が出され, 他のメンバーもそれに納得した様子であった。調査対象とした「トイレ・うんち本」の多くは, いわゆる「オムツはずし」の段階にある幼児がトイレに興味をもてるような楽しい内容となっており, 具体的なトイレの形やその使用方法についての描写は予想していたよりもずいぶん少ない(ほとんどない), というのが調査後の彼らの考察であった。

4-3. トイレ教育の実際は?: 「子育ての駅千秋てくてく」におけるフィールド調査

グループは, 新聞記事等の資料収集・整理や中央図書館における絵本の分析・考察を経て, いよいよ現地に出向いてのフィールド調査を計画・実施する

ことにした。幸いにもグループに元保育士の母親をもつメンバーがいたことから調査のおおまかな概要をお伝えし, 「子育ての駅千秋てくてく」(長岡市)に勤務する保育士N先生をご紹介いただきインタビューさせていただくことになった。「子育ての駅」とは, 「全天候型の運動広場と子育て支援機能を一体的に整備した長岡市オリジナルの子育て支援施設」(長岡市広報)で, 新しい子育て支援のモデルとして全国各地から視察に訪れるなど注目を集めている。現在, 長岡市内に13の「子育ての駅」があり, そのうち「子育ての駅千秋てくてく」は最も早い時期(2009年)に設立された。「保育士のいる公園」として一時保育にも対応している(「せんしゅう保育園」)。また, これまでに日本建築家協会賞など数々の賞を受賞している¹³⁾。

現地調査は2016年1月18日に実施された。N先生には「てくてく」での活動に限定することなく, 保育士としてのこれまでの経験を振り返りながら, トイレに関する教育の現状や課題, 和式トイレへの対応, 子どもとの関わりのなかで特に気をつけていることなど, 「トイレ教育」についてのお考えを率直にお話いただけるよう意識してインタビューを行った(写真4)。以下は, インタビューで明らかになった内容である(なお, 筆者は本調査に同行することができなかったため詳細を記述することはできない。そのため, 学生による調査記録をもとに概要を記すにとどめたい)。まず, トイレでの「用の足し方」(方法)を教えることよりも, トイレに行こうとする姿勢を身につけさせたり, トイレが決して怖い場所ではないということを理解させたりすることに重点を置いた「トイレ教育」が行われている。実際に「てくてく」では, トイレの手すりや床, スリッパを黄色で揃えたり, シールや切り絵を貼っ



写真4 「トイレ教育」についての聞き取り調査



写真5 明るい雰囲気づくりがなされたトイレの見学

たりして明るい雰囲気を作り出すための様々な工夫がなされていた(写真5)。また、幼児がトイレで上手に排尿・排便をすることができたら大袈裟に褒め、次もまたトイレでおしっこをしたい、うんちがしたいという気持ちをもてるように意識して接しているとのことであった(ただし、「てくてく」では通常の幼稚園や保育園と違って毎日同じ子が施設を訪れるわけではないので、一貫したトイレトレーニングの支援は難しいとお話もあった)。和式トイレについては、グループの予想通り、使用が困難な子どもが多い。前後を逆にしてしゃがんでしまう子やおしりをつけて座ってしまう子もいるようである。幼稚園や保育園では和式トイレの設置が少なくなってきたり、また、家庭のトイレもほぼ洋式となっていることから和式トイレの経験をもたない子どもも多い。一方、小学校は依然として和式トイレが主流であることから、「どのように使い方を教えられるのか」という親の悩みを聞くこともあるそうだ。そのような相談に対しては、和式トイレが設置されている近所のスーパーマーケットで練習をさせたり、小学校で開催される運動会などの行事の際に小学校体育館のトイレを使用させたりして、(入学前に)和式トイレの使用経験をもたせることをアドバイスしているとお話であった。また、そのほかに、立って小便をすることができない男の子が増えていることや、しゃがむことができない子どもの存在についてもお話を伺うことができた。

4-4. いま必要な「トイレ教育」とは：グループディスカッションによるまとめ

フィールドワークから戻り、グループは「子どもとトイレ」の関係に着目してこれまで進めてきた調

査の結果をまとめる作業に取り掛かった。子どもたちが学校のトイレ(とくに和式トイレ)で用を足すことができない要因として、次のように大きく3つの側面から整理することができた。すなわち、家庭や多くの商業施設ではトイレ(大便器)の「洋式化」が進んでいるが、学校では改修がなかなか進まずいまだ「和式トイレ」が主流である。和式トイレの使用経験がなく、そのため使い方を知らないまま小学校へ入学する児童が多く、結果として便意をもよおしても我慢してしまう。こうした①環境的要因に加えて、学校トイレには「5K」と呼ばれるマイナスイメージが根強く存在し、それを理由に子どもたちは学校のトイレを敬遠する傾向にある。学校のトイレでの排便が「恥ずかしい」という思いもある(②精神的要因)。また、子どもたちの側にも「しゃがむ」動作がうまく行えないといった身体の“異変”も指摘されていた(③身体的要因)。

排便を我慢することは、子どもたちの健康に悪影響を及ぼす。整理された3つの要因を踏まえて、いま必要な「トイレ教育」とはどのようなものなのだろうか。グループではこの課題を中心にディスカッションすることとした。これまでの「トイレ・うんち」を題材にした絵本の検討やフィールドワークにおける聞き取り調査の結果から、現在の「トイレ教育」は子どもたちがトイレに対して抱く嫌悪感や抵抗感を和らげることに重点が置かれている(すなわち「②精神的要因」への働きかけが中心となっている)と考察できる。これは確かに大切な働きかけであるが、実際に学校で排便を我慢している子どもたちへのより現実的な対処として、「和式トイレの使用方法」を具体的に教育・指導する機会や方法が必要ではないか、環境そのもの(①環境的要因)を即座に改善することは難しいがそれへの「適応」を重点的に支援することは可能ではないか、という意見が出された。本調査で収集された新聞記事のなかには、例えば、和式トイレの両サイドに足形シールを貼り付けて、正しい方法での使用を促す試みがあることを知った(朝日新聞、2014年12月20日)。また、和式トイレの使い方を教える絵本などの教材も紹介されている(朝日新聞、2009年3月19日)。学校のトイレ問題は、今後、洋式化が進むことで徐々に解消されていく。しかし、その過程にある現在においては、子どもたちに「和式トイレの使い方」を具体的に教えることが優先的に必要である。ディスカッションはこのような意見に集約されたところでもまとめとした。

前年度の「学校給食と牛乳」のグループ研究と同様に、本研究はメンバーの一人の卒業研究へと継承された。小学校教諭や保育士への聞き取り調査とともに、学校現場で生じているトイレ問題やそのための教育・指導の実態が詳細に記述された（宮嶋秀彰「学校トイレ環境の実態とトイレ教育に関する考察」平成28年度卒業論文）。

5. フィールドワークによる健康学習の意義と課題：保健授業に関する実践的指導力育成の視点から

本稿では、グループ活動における健康学習の実践として、「学校給食と牛乳」（H26年度）、「学校のトイレ問題」（H27年度）をテーマに取り組んだ2つの研究を紹介した。紙幅の都合により本稿では取り上げることができなかったが、平成28年度は「新潟県の児童に虫歯が少ないのはなぜか？」というテーマでグループ研究を実施し、「フッ素洗口」の先駆的取り組みと歯科教育の充実によって、県内児童の歯の健康が支えられていることを考察した。

ここで取り上げたグループ研究は、本稿の冒頭で記したように、研究の方法論を実践的に学ぶことを目的とする授業の一環として取り組まれたものであるが、これを保健授業に関する実践的指導力の育成という視点から捉え直したとき、どのような意義を見出すことができるだろうか。ここでは大きく2つの視点からフィールドワークによる健康学習の意義を検討する。そのうえで、今後の課題を整理し本稿のまとめとしたい。

(1) 身近な健康課題の再発見と社会的視点での捉え直し

学校給食における牛乳の提供や学校トイレで排便を我慢する子どもの存在、というように、それぞれのグループが「身近な」健康課題に関心を向けそれを追究しようとする姿が見られた。また、それらを個人レベルの問題として捉えるのではなく、社会環境の変化や日常生活のなかに位置づけて捉え直し、多面的に検討しようという意識をグループでの研究プロセスを通じて身につけていくことができたと考えられる。

現在の学校給食における牛乳の提供を「戦後の学校給食の変遷」という観点から考察するとともに、学校給食が1日3回の食事のうちの「1回」であることを再認識しそれが現代の児童生徒にとってどう

いう意味を持つのか、偏った栄養摂取や食生活の乱れが指摘される子どもたちの姿を思い浮かべながらグループディスカッションを深めた。学校給食における牛乳提供の是非を「学校の問題」として狭く考えるのではなく、食生活全体へと視野を広げて検討できたのは、繰り返し行われたディスカッションを通じてメンバーそれぞれがもつ視点を共有し、それらを互いに尊重したうえで発展的に議論を深めることができた成果といえよう。

学校トイレのグループ研究では、学校で排便を我慢する子どもたちに焦点を当てた。「排便を我慢することが健康にどのような悪影響を及ぼすのか？」という問題を押さえつつも、個人レベルの行動変容に議論を絞り込むのではなく「なぜ我慢してしまうのか？」という観点から家庭や地域へと目を向け、普段使う「洋式トイレ」と学校で主流の「和式トイレ」の狭間で戸惑う子どもたちの存在を考察した。フィールド調査においては、幼児教育に携わる保育士への聞き取りを通して、小学校入学前の子どもをもつ母親にとっても大きな心配事となっていることを知り、問題の深刻さを改めて実感した。このように広く社会の問題として捉えながらも、最終的には、子どもたち各々に対して「和式トイレの使い方」を具体的に教育・指導していくことの必要性へと議論を進めた彼らなりの結論は、（その具体策の提案というところまでは至らなかったものの、）説得力をもつものといえる。

以上のように、本稿で取り上げたグループ研究は「健康」に関わる身近な問題や取り組みを対象にフィールドワークの実施を企図しつつも、その前段階にある資料検討やディスカッションを通じた問題点の整理、研究課題の明確化に重点を置いている。これらの実践を通じて、健康を社会や日常生活のなかに位置づけて多面的・多角的に思考する力を育むことは、保健体育科教員を目指す学生において非常に重要である。

(2) 「指導としての保健授業」から「学びとしての保健授業」へ

「健康教育教科『保健科』成立の政策形成—均質的健康空間の生成—」¹⁴⁾という優れた研究書がある。著者である七木田は、学校教育カリキュラムに健康教育教科として「保健科」が位置づけられた過程を歴史的に検討しその意味を丁寧に検証した。この書籍の「あとがき」に記された1つのエピソードを（少し長くなるが）引用してみたい。

「ある学校で保健の授業をみせていただいたとき、授業後に子どもが『御説ごもっとも』といって教室を去っていく姿を目にしたときがあった。

すでに子どもが知っているであろう健康の価値を、教師の教授技術で巧みにカバーした授業であったが、子どもには『学び』としての授業ではなく、『指導』として受け止められていた。子どもたちは『保健』の授業というだけで、授業の行き着く先をはじめから見抜いていたのである。そして、子どもが時折見せる表情は、『健康は大切であり、病気をせずに長生きするための術を学ぶことに、いったいどのような意味があるのか』といわんばかりであった。

一方、保健の授業を担当した教諭に目を転じると、健康の価値を自明のこととして、これに支えられながら授業を行っていた。工夫を凝らした教材や教具を準備していたが、行き着く結論は、『健康は大切』ということであった。大切なのは、授業をする前からすべての子どもは知っているし、改めて教師から語られるまでもない。よって、これを敏感に感じ取っていた教師も授業後は、『何かが違う』といった表情をしていた。」(P283)

教える側も、教えられる側も「健康は大切」ということを授業の前からわかっている。そのために、子どもたちは「学び」というよりも「指導」として授業の内容を受け止めていた。保健の授業を構想するうえでの難しさが、このエピソードに凝縮されているように思える。「指導としての保健授業」から「学びとしての保健授業」へと転換していくために、教師が考えておかなければならないこととはどのようなものだろうか。

保健の授業では、子どもたちが学校教育を修了したあとも、健康や安全に関するさまざまな課題に「主体的に」関わっていくことのできるような思考力・判断力を身につけさせる必要がある。自らの健康を適切に管理し改善していくとともに、健康的な日常生活を営むための社会づくりにも関わっていくことができる資質や能力の育成である。そのためには、まず、教師自身が「健康」の諸問題に関心を向けそれを突き詰めて考える力を養うことが何よりも大切である。そうした作業を通じて、子どもたちに何を考えさせたいか、がより鮮明になる。また、子どもたちが「前のめり」になってさらに追究してみたい、と思えるような授業をつくるためにも教師自身が健

康を考えること、学ぶことに対して意欲的に取り組むことのできる態度をもつことが不可欠である。こうした観点から考えると、本稿で取り上げたように、保健体育科の教員養成段階にある学生が身の回りの健康課題に着目し、様々な資料の検討や聞き取り調査によって問題の全体像を把握したり、得られた情報をもとにディスカッションを行い課題解決に向けた学習を協同で進めたりするような実践的な学びのプロセスを経験すること、そして、そのプロセスを通じて学びをより深めていくことは意義ある学習活動と思われる。それは、健康の保持増進に関わる様々な要因や背景を広い視野で検討し対処していく方法を学ぶ取り組みであると同時に、「健康の価値」を繰り返し問い直す作業でもある。

(3) 今後の課題

2017(平29)年3月に公示された新学習指導要領¹⁵⁾では「主体的・対話的で深い学び」、すなわちアクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業づくりが重視されている。本稿で取り上げた実践は、保健科に関わる教科教育法講義の一環として実施されたものではなく、保健の授業づくりを念頭に取られたものではない。しかし、学生自らが身近な健康課題に着目し、フィールドワークやグループディスカッションなどの経験を通して「健康」に対する視野を広げ、また、健康課題の解決に向けて主体的・協同的に思考を深める学習となったことは、保健授業に関する実践的指導力の育成という観点からも大変意義深い。今後はこうした実践的な学びの経験を、保健の教材開発や授業構想、授業実践へとつなげていけるような機会を設定し、保健の授業に自信をもって取り組むことのできる保健体育教師の養成を目指したい。

※本稿に掲載の写真は被写体本人より使用の許諾を得ています。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領. pp. 94-97.
- 2) 近藤真庸(2002) “生きて働く”学力の形成と保健授業づくり. 森昭三, 和唐正勝(編) 新版保健の授業づくり入門. 東京:大修館書店, pp. 66-80.
- 3) 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領解説 保健体育編. pp. 162-163.

- 4) 牧下圭貴 (2009) 学校給食 食育の期待と食の不安のはざまで. 東京: 岩波書店.
- 5) 三浦正行 (1995) PHW の戦後改革と現在. 京都: 文理閣, pp. 219-252.
- 6) 丸井英二 (1992) 戦後栄養政策の裏面史のこと (上). 保健の科学34(2): 120-122.
- 7) 高嶋光雪 (1979) アメリカ小麦戦略. 東京: 家の光協会.
- 8) 鈴木猛夫 (2003) 「アメリカ小麦戦略」と日本人の食生活. 東京: 藤原書店.
- 9) 谷川建司編著 (2011) 占領期のキーワード 1945-1952. 東京: 青弓社, pp. 135-137.
- 10) 雨宮正子 (1992) 学校給食. 東京: 新日本出版社, pp. 60-67
- 11) 農林水産省 (2006) 食育推進基本計画 (第1次).
http://www.maff.go.jp/j/study/tisan_tisyo/h18_01/pdf/data11.pdf
- 12) NHK ホームページ. 子どもの体に異変あり～広がる“ロコモティブシンドローム”予備軍～ (クローズアップ現代, 2014年4月23日放送).
<http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3489/1.html>
- 13) 長岡市ホームページ. 子育て支援 (てくてく).
<http://www.city.nagaoka.niigata.jp/kosodate/cate99/tekuteku/>
- 14) 七木田文彦 (2010) 健康教育教科「保健科」成立の政策形成—均質的健康空間の生成. 東京: 学術出版会.
- 15) 文部科学省 (2017) 新学習指導要領 (平成29年3月公示). http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm